歳時記のある暮らし

二〇二一年《七月》

熱気を帯びた風を受け夏の風物詩に心躍るころです。

皆様、おすこやかにお過ごしでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

七月は、夏のレジャーシーズンの幕開けを告げる山開き、海開きから始まります。山開きはもともと山岳信仰によるもので、日本の山には僧侶しか入れない神が宿る聖域とされるところもありました。江戸時代になると、一般の人々も山に入って神々を拝むことが許されるようになり、この期間を山開きと呼びました。海水浴シーズンの始まりを告げる海開きは山開きとは異なり、海の信仰に基づいているわけではありません。しかし山開きも海開きも、思い出づくりの夏の訪れを告げる大切な節目です。

七月七日は五節句のひとつ「七夕の節句」です。色とりどりの七夕飾りが軒先で風に揺れる光景は夏の爽やかな風物詩です。七夕飾りにはそれぞれ意味があり、紙衣は裁縫の上達、巾着は貯金、投網は豊漁、屑籠は整理整頓、吹き流しは機織りの上達、千羽鶴は長寿、そして短冊は祈願成就を願うものです。飾りをつける笹や竹は、料理の飾り付けや彩りにも使われますが、抗菌作用があり日本では神聖なものとされてきました。竹は、内側と外側、聖なる場所と俗なる場所との境界を定める結界にも使われています。竹は一日に一メートル近くも伸びるといわれるほど力強いことから精霊や神様が宿る依代と考えられていました。

だからこそ、人々は、天に向って真っすぐ勢いよく伸びる竹に願いごとを託したのでしょうね。

柔らかにしなる竹や、流線形の細長い笹は、宇宙に流れる天の川のイメージにぴったりです。

「蓮始開（はすはじめてひらく）」

七月十二日から始まる七十二候の季節です。朝の訪れとともに花を開かせ、昼が過ぎるころには閉じてしまう蓮の花は見る者を幽玄の世界へと誘います。たった五日ほどの短い季節ですが、暑さが厳しくなる前の涼やかな水辺の情景が楽しめる期間です。

「ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きに

（裏へ続きます）

なっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。

極楽は丁度朝なのでございましょう。

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』。「蓮は泥より出でて染まらず」といわれるように、蓮は仏教では泥水、すなわち煩悩や苦しみの中にあっても汚れることのない「清らかさ」の象徴です。

蜘蛛の命を救ったたった一度の善行を汲んで救いの手を差し伸べようとしたお釈迦様、自分だけが地獄から抜け出そうとする人間、その成り行きを観ている蓮が描かれて、こう締めくくられます。

「しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽ももう午に近くなったのでございましょう。」

蓮は、お釈迦様が罪人を救おうとするところを数多く見てきたけれども、残念ながら、そのお気持ちが報われるところを一度も見たことがなかったのかもしれません。お釈迦様の悲しみに共感するものの、蓮には蓮の仕事があり午後には花を閉じなければならず、いつまでもお釈迦様のお気持ちに付き合っている暇はありません。お釈迦様の慈悲心、人間のエゴイズム、蓮の超然と執着しない姿をわかりやすく描いた児童文学です。睡蓮鉢に蓮や水草を浮かせて涼を得ながら、蓮の咲く美しい極楽浄土に思いを馳せるのもこの時期、素敵なことですね。

七月二十八日は土用の丑の日。雑節の土用は年に四回ありますが、夏土用が印象的です。高温多湿な夏に向けて体調を崩さぬよう「栄養のあるものを食べる」という習慣ができたのでしょう。鰻や牛、梅干しなど「う」のつく食べ物が良いといわれます。昔、夏土用では、土用干しが行われ、梅雨の間にカビ臭くなった衣類や書物、田んぼ、梅などを干して乾燥させました。また、薬草湯を作ってお湯につかる「丑湯」の習慣もあり、江戸時代にはあせもや湿疹をなおす桃の葉を丑湯に使っていたそうです。夏を元気に過ごすための参考にしたいものです。

熱中症を予防するため、こまめに水分を補給し、涼しい時間帯に外出しましょう。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係 お手紙担当 久郷直子